



## 2年越しの思い

【佐賀県】坂井 祐子 さふい ゆうこ  
36歳

私は1人目の子どもを妊娠8カ月の時、常位胎盤早期剥離で亡くした。救急車で病院に運ばれたが、赤ちゃんの心音は戻ることはなかった。死産だった。

突然の悲しみから2年後、妊娠したことが分かった。2年ぶりの病院。不安のほうが大きかった。個室と呼ばれ「こんにちは」と声がして見上げるとそこには私をうれしそうに見つめる人がいた。最初の入院の時に担当してくれた看護師さんだった。その看護師さんは毎回「順調だね、何かあったらすぐ教えてね」と笑顔で声を掛けてくれた。不安な気持ちが大きくなり泣いてしまう私にずっと背中をさすって話を聞いてくれた。

そして無事に男の子を出産。退院後の1カ月検診も問題なく終わり帰りに看護師さんに今までの感謝を伝えると「……あのね、2年前の入院の時、最後に亡くなった赤ちゃんの体を拭いて体重を測ったりするのは私の担当だったの。それで準備が終わってお父さんに赤ちゃんを抱いてもらったのね。そしたらお父さんが『ごめんな、ごめんな、助けてあげられなくてごめんな』って抱きながらずっと泣いていたの。そして『入院中、妻のことは僕がしっかり支えます。妻のことよろしくお願ひします』って言われたの。衝撃だった。自分だってこんなにつらい中なのに父として家族にしっかり向き合っていることに。

私にとってもう忘れられない家族なの」と泣いて話してくれた。それから自分にもできることはないかと考え、小さく産まれた赤ちゃんに合う肌着を準備できないかと会議で提案したりしたそう。

そして最後に「今度私が命というテーマで中学生にお話しする機会があるのだけど良かったら家族のことお話しさせてもらっていいかな？」と聞かれた。あの時知らなかった家族の思い、看護師さんの思い。私はこんなにたくさんさんの気持ちに支えられてきたのか。涙が止まらずもう感謝の気持ちであふれた。「私たち家族のことで良ければ」と私は泣きながら笑顔で応えた。

